

飯島敏宏さん

(演出家・プロデューサー・脚本家)

テレビドラマ黄金期の舞台裏(上)

同じ画面でもスマホやタブレットのそれが大活躍する時代にあつて、テレビの画面は存在感が薄くなった。子供から大人まで、夢中になってテレビを見た昭和後半。テレビの現場はどのようなものだったのか？

怪獣登場には相当の理由あり

——まずはウルトラシリーズと関わるようになった経緯を教えてください。

僕は『ウルトラQ』(*1)の制作が始まる時には、国際放映に出向して、『泣いてたまるか』を撮っていたのです。ただ、国際放映は円谷プロの隣にあつて、円谷一さん(円谷英二の子)ともTBSの同僚でしたから、いろいろな話は耳にしていました。

もともと『ウルトラQ』は怪獣ものではなかったん

です。克蘭クイン段階では「UNBALANCE」(アンバランス)というタイトルで、SF的な内容で進んでいました。円谷特技プロ(以下、円谷プロ)の円谷一さんや金城哲夫さん(円谷プロ企画文芸室長)が日本SF作家協会の有力作家に依頼して、いい脚本が上がっていたんです。

ところが克蘭クイン後に、プロデューサーが梶井^{かこい}巍^{たかし}さんに代わった。梶井さんは視聴率を上げたいと考えていて、TBSと高額で契約していた円谷英二監督を活かして怪獣路線に変更した。円谷英二といえば『ゴジラ』(一九五四年、東宝)ですからね。

梶井さんの方針は「全話に怪獣を出してほしい」でしたから、拝み倒して脚本を頼んだSF作家の方々に、今度は金城哲夫さんが拝み倒して断ったんです。

それ以前、僕はTBSで三十分生放送の人気ドラマ『月曜日の男』(*2)を撮っていました。毎週の放送で、脚本が間に合わないときがあります。そのときは監督の僕が穴埋めで書きました。ウイリアム・アイリ

ツシユが好きだから藍立^{あいつりつたけ}愁^{しゅう}とか、千東北^{せんとうきたけ}夫^となどのペンネームで書きました。千束は、結婚して大田区北千束に所帯を持ったからです(笑)。

円谷一さんは、僕が脚本家志望でTBSに入社したことを知っていましたから、「怪獣ものだけ手伝わてくれる?」という話になって引き受けたんです。それが『ウルトラQ』の第一話になる「ゴメスを倒せ!」(*3)です。台本に間違つて千東北夫が千東北男と印刷されていたので、以後は千東北男にしました。——「ゴメスを倒せ!」のヒントは何だったのでしょうか？

怪獣ものの基本線はゴジラです。ゴジラは原水爆実験がなければ地上に現れることはなかったわけで、『ウルトラQ』でも怪獣登場の理由を、荒唐無稽なものでなく相当な理由があると明確にすることが条件でした。

『ウルトラQ』や『ウルトラマン』の初期の作品は非常にメッセージ性が高いといわれます。「関



●いいじま・としひろ 1932年生まれ。57年KRT(現・TBS)入社。ディレクター、プロデューサーとして『月曜日の男』『泣いてたまるか』『金曜日の妻たちへ』『思えば遠くへ来たもんだ』などのヒット作品に関わる。『ウルトラQ』『ウルトラマン』『ウルトラセブン』などウルトラシリーズの監督を務め、脚本も担当。バルタン星人生みの親でもある。

*3 「ゴメスを倒せ!」は、トンネル工事現場で山を掘ったときに、大きな卵が現れる。さらに洞窟の中で古代怪獣ゴメスが眠りを覚まされて暴れる。卵から原始怪鳥リトラが現れて、自分の命を犠牲にゴメスを倒す。このとき風変わりな少年ジローが謎解きをして、解決に導く。

*1 『ウルトラQ』1966年放映。全28話。

*2 1961~64年放映。主演=待田京介・主題歌=水原弘。最高視聴率40.9%。